関西自然保護機構会報（14）7—10，1987.

神島の研究と保護の歴史[1)]

—南方熊楠の保護運動—

真砂久哉[2)]

はじめに

神島は紀伊半島南部の田辺湾に浮ぶ二つの小島で面積は約3haである。この神島の北西約8km へだてた田辺湾外の南部町の沖にも鹿島（カシマ）と呼ばれる二つの小島がある。田辺地方の伝説に大昔，巨人が島をかついで歩いていた時に天秤棒が折れて海に落ち，二つのカシマになった，と言う話があるが，呼び名が同じなので，よく混同される。

田辺湾の神島は国の天然記念物に指定され，田辺市教育委員会が管理している。神島の天然記念物指定は南方熊楠（1867—1941）の精力的な運動によるもので南方熊楠なくしては現在の神島の豊かな自然は残らなかったと言っても過言ではないだろう。

神島の研究と保護の歴史も南方の運動を中心にして，南方以前の神島，南方と神島，南方以後の神島，と三つの期間にわけて考えたい。なお南方熊楠については笠井（1967）に詳しい。

1. 南方熊楠以前の神島（800—1901）

神島は万葉の昔から風光明媚な名勝の地として知られていた。“万葉集”（809？）に「月よみの光を清み，神島の磯間の浦に舟出すわれは」という詠人不知の和歌がある。月の美しい夜に磯間浦に舟を出して神島を眺めた光景を詠んだのだろう。その後平安時代以降の歌集にも神島を詠んだ和歌が10首知られている（宇井可道，1905）が，そのすべてが磯間の浦と神島を詠んでいる。磯間浦は田辺市東部の漁港で現在も神島への渡船場になっている。その近くにある和歌山県立田辺商業高等学校は神島のシンボルになっているハカマカズラの葉をデザインしたユニークな校章を制定した。高校新設当時の教頭，楠本定一は南方の長男，熊弥の親友だったので学校から見える神島に因んで校章にハカマカズラを使った。楠本は南方の伝記小説“紫の花天井に”（1982）を書いている。

江戸時代にも紀州の地誌，自然史を記録した書物が出版されているが，その中の“紀伊續風土記”に神島が書かれ（仁井田，1839），“紀伊名所図会”では神島は名勝の地として和歌3首と共に紹介されている（加納，1845）。

田辺には町人の代表だった大庄屋と田辺藩との接渉や領内で起きた事件などを記録した公式な日記“万代記”（1471—1839）“田辺町大帳”（1582—1866）“御用留”（1840—1869）があり，解讀出版が進められている。この中には神島について書いた項目もいくつかあり最も古いのは“万代記”4巻（1666）で「室郡新庄村の内，鳥の巣の沖，舟路4町ばかり島の周囲9町ほど御座候」と書かれている。鳥の巣は神島の東にある新庄町の小さな集落で，ここの人たちが神島明神を祀って来た。生物に関係した項目では“万代記”12巻（1718）に和歌山の紀州徳川藩主の要請で神島に産する貝や藻類を献上した記録や48巻（1782）には紀州藩の鷹匠が神島に渡るので磯間浦に舟を用意するようにとの通達が記録されている（田辺市教育委員会，1961，’66，’78）。

神島が生物研究の対象になったのは江戸時代に本草学が盛んになってからで，将軍家の本草家，小野蘭山が神島に上陸したとの説もあるが，前述の大庄屋の日記には田辺から舟で直接白浜に渡った記録はあるが神島に上陸したとは書かれていない。神島が本草書に初めて書かれたのは紀州藩の本草家，畔田翠山の“熊野物産初志”で「ワンジュ，大辺路江須崎，見老津，同所海島，江田小島，田辺加島に産す。蔓大にして樹上に至り葉あり」と記されている（畔田，1848）。ワンジュ，弯珠はマメ科ハカマカズラ属の蔓性植物 *Bauhinia japonica* MAKINO ハカマカズラで扁球形の黒い固い実をつける。平安時代から長い間續いた熊野三山詣の人たちが田辺に泊った時，この実を魔除け，虫除けのお守りに買ったと伝えられている。1940年頃までは新庄村で毎年秋に神島でこの実を拾い集めて京都の仏具屋に数珠の材料に賣ったが，その量は斗（18リットル）の単位で穫れたらしい。ハカマカズラは現在，紀伊半島の南西岸に見られ北限は日高郡由良町の黒島になっている。“熊野物産初志”に書かれ

1) 関西自然保護機構業績第45号

2) 田辺市中屋敷町57—1（田辺市文化財審議会委員，日本シダ学会）

た江須崎，見老津，江田小島は現在の西牟婁郡すさみ町，串本町，で江須崎には直径20㎝を越す大木がある。

畔田翠山の次に神島に上陸した生物研究家は外国人だった。幕末の頃，イギリスの水路調査船アクティオン号が日本近海を測量したが，その船医アーサー・アダムスは貝類研究家で紀伊半島でも串本の大島，田辺，由良などで貝を採集し，1861年の採集品の中に田辺産のムロマイマイ，コスジギセルなどの陸貝がある(ADAMS，1868)。この記録を調べた黒田徳米はアダムスは神島に上陸したのだろうと述べている（黒田，1944）。

1901年には日本の貝類研究のパイオニアだった平瀬与一郎の採集人，中田次平が紀南地方で採集したが，その中の田辺湾カシマ産の貝も神島産と考えられる（黒田，1944）。

このように19世紀までの神島は景色の良い島でありハカマカズラの実と陸貝の産地として知られていた。

2. 南方熊楠と神島（1902—1941）

神島を生態学の眼で見たのが南方熊楠である。南方は1902年に田辺を訪れ，初めて神島に渡り，その２年後には田辺に住みついて紀南地方の生物，特に変形菌(粘菌)を調査研究し，神島の粘菌についても“植物学雑誌”に報告している（南方，1908，'15，'27）。

1907年頃，内務省が全国の神社を管理するために神社合祀令を公布し，一村一社の単位に神社や祠を統合する政策を進めた。南方は生態系保護の立場から，この政策に対し猛烈な反対運動を起した。神島明神も新庄村の大潟神社に合祀され，島に御神体がなくなると鎮守の森の古い樹木は高価に取引されるようになり，神島の森林も新庄小学校の校舎改築の費用のために賣却され，こやまと呼ばれていた小さい方の島は伐採が始っていたが南方は漁業への悪影響やハカマカズラの保護などの理由で新庄村村長に伐採を止めるよう説得したところ村長も納得し，村議会を開いて伐採中止を決議し代金を払い戻した（南方・毛利，1934）。

神島の自然保護の必要を痛感した南方は1912年に先づ和歌山県に魚付保安林を申請して指定を受け，続いて田辺高等女学校教諭の宇井縫蔵と共に“ハカマカズラの北限自生地”として和歌山県に天然記念物を申請し(宇井，1924）1930年に指定されている。

1929年には天皇陛下が軍艦で田辺湾に来られ神島に上陸して生物を調査され，この時，南方は軍艦の上で進講した。この行幸に際し南方は大阪毎日新聞に“紀州田辺湾の生物”を連載し神島の自然を紹介した(南方，1929)。翌年には行幸を記念して神島に南方自詠自筆の「一枝も心して吹け沖つ風，わが天皇のめでましし森ぞ」の歌碑が建てられている。

この機会に神島を国指定の天然記念物にする運動が始まり，その資料にするために神島の樹木を調査した。1934年に先づ田辺営林署の技師に依頼して全島を詳しく測量し，等高線の入った地図に自生している樹木の和名と位置を記入したもので，調査には南方をはじめ田辺高等女学校教諭の北島脩一郎，小学校訓導の樫山嘉一，平田寿男，前新庄村長の田上茂八らが参加し，何日も神島に渡って全島をくまなく踏査した。この“田辺湾神嶋顕著樹木所在図”(太田，1957)と“神島の調査報告”(南方・毛利，1934)を文部省に提出し申請した。翌年，植物学の三好学，地質学の脇水鉄五郎が来紀して神島を調査した結果，1936年１月15日付で国の天然記念物に指定された。

このように神島は南方の努力により神社合祀令施行後の森林伐採を免れ，魚付保安林，和歌山県指定天然記念物，国指定天然記念物と三段階を経て行政的に保護されるようになった。これには南方の神島を愛する情熱と共に南方の親友で牟婁新聞を主宰し県会議員もつとめた毛利清雅の力も大きかったと推察される。

南方の神社合祀反対や天然記念物指定の運動は専ら手紙による陳情だった。柳田国男や東大教授の松村任三，三好学，脇水鉄五郎に長文の書簡を次々と書き送っている。南方熊楠全集（平凡社）全12巻のうち書簡は４巻を占めているが，この他に出版されていない書簡も多い。筆者は南方と神島の関係を調べるために南方全集(南方，1929—'36)や田辺市で発行された書簡集（南方，1929—'38）に目を通したが神島について書いた書簡は18人に宛てた66通が数えられた。この他にも神島の天然記念物指定に尽力した毛利清雅宛の書簡が百数十通あり，現在，南紀高校教諭の中瀬喜陽が解讀しているので神島関係の新しい資料が見出されるのではなかろうか。しかし書簡や新聞記事には学術論文とちがって誇張したり正確を欠く表現も見られる。“紀州田辺湾の生物”に「藻が蘚苔類に進化した実証に立つべき大珍品ありて多年研究を重ねおるが……」と書いているが，そのような海藻はなくコケに似た藻類の *Bryopsis* ハネモか，*Caulerpa* イワヅタではないかと言われている（北川，1974）。

南方は12冊もの全集が発行されるほど民俗学の論著（南方，1925a，'25b，'25c，'51—'52，'68，'71—'75，）や書簡を書いたが生物学の報告は“植物学雑誌”に発表した粘菌目録など５篇だけなのは物足りない。ライフ・ワークの“日本産菌蕈類彩色図譜”には4,500種の菌類を収録し15,000枚の原稿・図版も完成していたが出版されな

かった。これが南方の生前に出版されていたら菌類研究家として評価されただろう。この原稿は数年前から菌類研究家の小林義雄が再検討し編集した原稿も出来ているが出版社が決っていないと聞いている。

最近は南方ブームと言えるほどで多くの伝記や評論が発行されている（中山，1943，笠井，1980，'82，'86，飯倉，1974，鶴見1978，'81）ほか。そのユニークな生きざまをモデルにした伝記小説も出版され雑誌にも連載されている。南方が有名になれば，今　問題になっている田辺市の南方邸の保存や白浜町の南方熊楠記念館の運営にもプラスになるだろうが，南方について書いているのは民俗学者や作家で生物学の面からの評論がないのは淋しい。南方の生い立ちを見ても本質は博物学者，ナチュラリストなのだが有名になるにつれて生物学者としてのイメージが薄れるのではなかろうか。

南方は1941年12月29日，75歳で没した。この年の８月，腸に出血して徐々に衰弱していたが息を引取る日，長女の文枝が医師を呼ぼうか，と聞いたところ「天井に紫色の花が咲いている。医者が来れば花が消えるから呼ばないでくれ」と答えて深い眠りについた。と伝えられている。この紫の花は神島に自生する樗（アウチ），センダン科 センダン属，センダン *Melia azedarach* L. var. *japonica* MAKINO である。

墓所は田辺市高山寺にある。遺族の長男，熊弥は田辺中学校卒業の頃に精神を病み1960年53歳で不幸な生涯を終えた。松枝夫人は1955年に没し，長女，文枝は日本大学水産経済学教授の岡本精造に嫁したが子宝に恵まれず，現在，田辺市中屋敷町の南方邸に独り住んでいる。熊楠の弟，常楠は和歌山市で南方酒造会社を創立，現在，常楠の孫が継いで銘酒「世界一統」を醸造販賣している。

1962年に白浜に来られた天皇陛下は30余年ぶりに神島に上陸される予定だったが天候が悪く中止された。ホテルの窓から神島をご覧になった天皇は「雨にけぶる神島を見て，紀の国の生みし南方熊楠を思う」と初めて個人の名前を詠んだ和歌を作られた。この歌碑は白浜町の南方熊楠記念館の前に建てられているが，この和歌が南方と神島の深い因縁を象徴していると言えよう。

3. 南方熊楠以後の神島（1942—1986）

南方が他界して２年後の1943年に貝類研究家の黒田徳米が神島を訪れているが，これはアダムスの報告を見たからだろう。1949年には日本貝類学会の20周年記念大会が白浜町の京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所で開催されエクスカーションで神島に渡っている。

この頃，新庄村は田辺市と合併し神島は田辺市が管理することになった。1955年に田辺市教育委員会に文化財調査会が設置され，その最初の事業が神島調査だった。終戦直後の混乱期にハカマカズラの大木が盗伐されたこともあり，南方らが樹木を調査して20年を経過した時期での調査だった。この時は愛媛大学の森川国康に土壌小動物の調査を依頼したが節足動物のカシマイボテカニムシ（森川，1957a，'57b，'57c ）倍足動物のカシマセスジアカムカデ（三好，1957）などの新種が発見された。

その後，京大臨海実験所所長だった内海富士夫は神島と，その隣の臨海実験所が管理している畠島の自然環境に関する文献目録を作製し（内海，1967），後藤伸は田辺高等学校生物部の生徒を指導して神島の森林植生を調査し（後藤，1968），眞砂久哉はシダ植物を（眞砂，1970），湊宏は神島の陸貝を（湊，1973），太田耕二郎は顕花植物とコケ植物を調査報告している（太田，1978，'79，'83，'84）。

田辺市文化財審議会は1955年発足以来，毎年１回“田辺文化財”を発行し，神島の生物や岩石について調査報告して来たが，南方らの樹木調査から50年経った機会に新しく樹木を中心にして陸上生物調査を実施することになり1983年から1986年にかけて変形菌，コケ植物，シダ植物，顕花植物，土壌小動物，陸貝，昆虫，鳥や陸上生物研究史などを，それぞれの専門分野の研究者に依頼して調査した。特に樹木については50年前と同じ方法で調査し現在の樹木位置図を作製している。これらの調査報告は1987年４月以降に田辺市教育委員会が発行する予定である。

現在，神島は国指定天然記念物であり天皇や南方熊楠との関係も深いので無断上陸を禁じているが，今後も保護につとめて紀伊半島南部の海岸自然林を代表する島のひとつとして生物研究のフィールドに供したい。

参　考　文　献

ADAMS, A. 1868. On the species of *Helicidae* found in Japan, Ann. Mag. Nat. Hist. **4**. (1): 459–472.

後藤　伸・田辺高等学校生物部. 1968. 紀伊半島における極相林の研究Ⅱ，Ⅲ神島. 田辺文化財 **11**: 4－7

飯倉照平. 1974. 南方熊楠－人と思想－. 320pp. 平凡社，東京.

加納諸平. 1845. 牟婁郡 神島. 紀伊名所図会・下 **4**: 782. 貴志康親〔1937〕，和歌山.

笠井　清. 1967. 南方熊楠. 368pp. 人物叢書. 吉川弘文館，東京.

——．1980．南方熊楠―人と学問―．292pp．吉川弘文館，東京．
——．1982．南方熊楠―親しき人々．286pp．吉川弘文館，東京．
——．1986．南方熊楠外伝．182pp．吉川弘文館，東京．
北川尚史．1974．南方熊楠とコケ．南紀生物**16**（2）：29－30．
畔田翠山．1848．ワンジュ．熊野物産初志 1 草類：27．紀南文化財研究会〔1980〕，田辺．
黒田徳米．1944．田辺湾神島産陸貝．Venus**13**（5－8）：313－316．
眞砂久哉．1970．田辺・西牟婁地方のシダ植物3，田辺市新庄町に自生するシダ植物．田辺文化財**13**：13－17．
南方熊楠．1908．本邦産粘菌目録．植物学雑誌**22**（260）．南方熊楠全集 **5**：600－606．平凡社〔1972〕，東京．
——．1915．訂正本邦産粘菌目録．植物学雑誌**29**（345），南方熊楠全集 **5**：607－619．平凡社〔1972〕，東京．
——．1925a．南方閑話．183pp．坂本書店，東京．
——．1925b．南方随筆．468pp．岡書店，東京．
——．1925c．續南方随筆．460pp．岡書店，東京．
——．1927．現今本邦に産すと知れた粘菌種の目録．植物学雑誌**41**（482），南方熊楠全集 **5**：622－628．平凡社〔1972〕，東京．
——．1929．紀州田辺湾の生物．大阪毎日新聞，南方熊楠全集 **6**：276－294．平凡社〔1973〕，東京．
——．1929－'36．書簡．南方熊楠全集 **9**．630pp，別 **1**．627＋28pp．平凡社〔1973，'74〕，東京．
——．1929－'38．南方熊楠書簡集．196pp．紀南文化財研究会〔1981〕，田辺．
——・毛利清雅．1934．神島の調査報告．南方熊楠全集**10**：99－103．平凡社〔1973〕，東京．
——．1951－'52．南方熊楠全集12巻．乾元社，東京．
——．1968．南方熊楠随筆集．361pp．筑摩書房，東京．
——．1971－'75．南方熊楠全集10巻，別2巻．平凡社，東京．
湊　宏．1973．紀伊半島南岸島嶼の陸産貝類相．南紀生物**15**（1），9－12．
三好保徳．1957．日本産倍足類及び脣足類の分類学的研究20．セスジアカムカデの1新亜種 *Octocrytopus rubigino－sus Kashimensis* 動物学雑誌**66**（6）：264－268．
森川国康．1957a．和歌山県田辺湾神島の動物目録．田辺文化財 **1**：12－26．
——．1957b．Cheliferidae の一新擬蠍 *Kashimachelifer cinamomes*．動物学雑誌**66**（10）：399－402．
——．1957c．Terrestcal fauna of Kashima Islets in the Bay of Tanabe, Wakayama Pref. publ. Seto Mar. Biol. Lob. **6**（2）：225－240．
中山太郎．1943．学界の偉人 南方熊楠．237pp．富山房，東京．
仁井田好古．1839．牟婁郡田辺荘 新庄荘 神島明神森．紀伊續風土記 **2**（71）：658－659．歴史図書社〔1970〕，東京．
太田耕二郎．1957．神島の生物について．田辺文化財 **1**：2－11，26－35．
——．1978．南方熊楠と神島の植物Ⅰ．田辺文化財**21**：1－4．
——．1979．南方熊楠と神島の植物Ⅱ．田辺文化財**22**：1－4．
——．1983．田辺市の蘚苔類Ⅰ 蘚類．田辺文化財**26**：7－26．
——．1985．田辺市の蘚苔類Ⅱ 苔類，ツノゴケ類．田辺文化財**27**：1－13．
田辺市教育委員会．1961．名所古跡書上．万代記 **4**：78．
————．1966．貝67ケ，藻3色，紀州藩主に献上．万代記**12**：90．
————．紀州藩鷹匠．神島に渡るにつき舟の用意．万代記**48**：7．
鶴見和子．1978，'81．南方熊楠―地球志向の比較学―．日本民俗文化大系 **4**，416pp，講談社学術文庫**528**，318pp．講談社，東京．
宇井可道．1905．磯間浦．璞屋随筆 **4**，牟婁郷名勝誌：26－28．宇井縫蔵，田辺．
宇井縫蔵．1924．はかまかづらノ北限自生地．和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告 **3**：43－45．
内海冨士夫．1967．畠島，神島の自然環境に関する文献目録．南紀生物 **9**（1）：1－3．